自己評価に基づいた授業改善サイクルモデルの提案

A Proposal for a Course Improvement Cycle Model based on Self-Assessment

宮崎 誠[*1]
Makoto MIYAZAKI[*1]
[*1] 畿央大学教育学習基盤センター
[*1] Center for Teaching, Learning and Technology, Kio University
Email: m.miyazaki@kio.ac.jp

あらまし：ボトムアップによる教育の質保証の実現を目指し，学習者自身による学習到達度の自己評価に着目した授業改善サイクルモデルを提案する．自己評価にはルーブリックを採用することで，学習者は客観的に学習を評価でき，次のレベルの学習に向かう指針とすることができる．また，自己評価結果を学習目標毎に得点として集計することで，授業の学習目標の達成度を客観的に評価することができ，次回の授業を改善するための形成的評価が可能となり，ルーブリックの評価規準による教育の質保証への活用が期待できる．

キーワード：ｅポートフォリオ，ルーブリック，プラグイン，FD，質保証

1. はじめに

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の構築（審議のまとめ）」(2008 年 3 月 25 日)では，「現代の社会は，個人が生涯にわたって学習し，複数の職業や組織で働き，活動する流動性の高い社会である．個人の能力を評価する方法として，ポートフォリオが重視される時代ということができる．学士課程における評価に当たっても，多様な学習活動の成果を評価する観点から，学習ポートフォリオの手法を積極的に取り入れていくことは有意義である」と提言している(1)．

実際にｅポートフォリオは学習成果および成長プロセスを測るうえで，ｅラーニングシステムとの親和性も高く，教育の質保証を保証するエビデンスとしての活用が期待できる．それにも関わらず，その学習成果および成長プロセスを測るための客観的指標および機能が乏しいために，ｅポートフォリオシステムと呼ばれるシステムを導入しても単なるの学習成果物の蓄積システムや掲示板システムと何ら変わらない運用の報告が多く，教育の質を保証する役割を担うまでには至っていない．

そこで本文では，ｅポートフォリオによる学習到達度や成長プロセスを測る客観的指標としてルーブリックを採用し，学習者の自己評価結果を用いて，授業改善に活用する方略について述べ，この一連の授業改善活動を「自己評価に基づいた授業改善サイクルモデル」として提案する．

2. 授業改善サイクルモデル

提案する自己評価に基づいた授業改善サイクルモデルを図 1 に示す．学習目標を明確化し，評価の指針として作成したルーブリックが規準となり，授業改善を回していく PDCA サイクルモデルとなっている．

2.1 ルーブリックの作成

大学が「何を教えるか」ではなく，学習者が「何ができるようになるか」という観点から，授業の学習目標を明確にし，学習目標に対応したアウトカムが評価の対象となるようルーブリックを作成する．また，大学のディプロマポリシー等の教育目標との体系の一部として学習目標が設定されることが，結果，教育の質保証を担う上で重要である．なお，図 1 にはルーブリックとともにチェックリストも併記しているが，これは，チェックリストをルーブリックの評価レベルの次数の違いと解釈できる，つまり，評価のレベルが「できる」「できない」の２段階で表すものがチェックリストとして捉えられるということである．教育の体系化とルーブリックとの位置付けを図 2 に示す．

2.2 自己評価

学習者は，学習到達度をルーブリックで自己評価する（図 3）．自己評価を通して，自身の学習を振り返ることに繋がる．また，評価のエビデンスの作成，

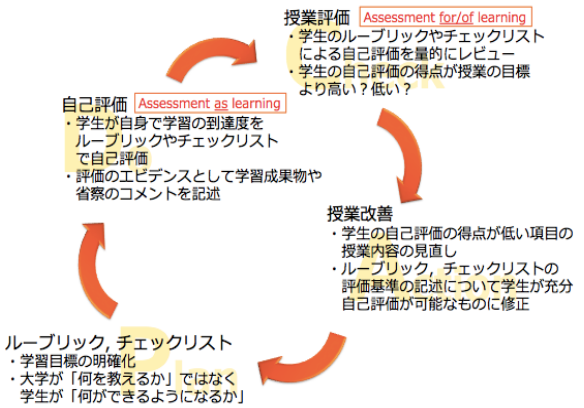

図 1 自己評価に基づいた授業改善サイクルモデル

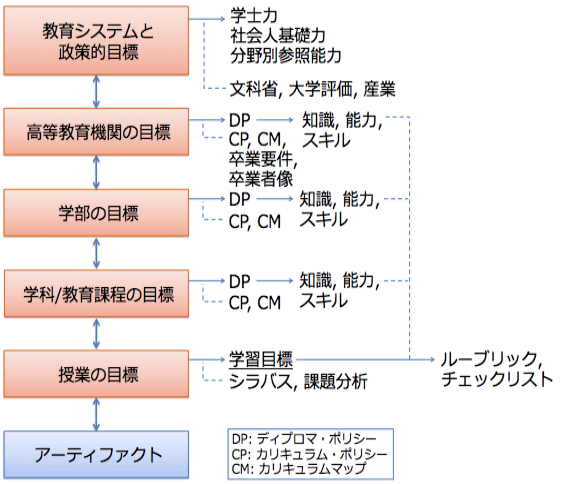

図 2 教育の体系化とルーブリック

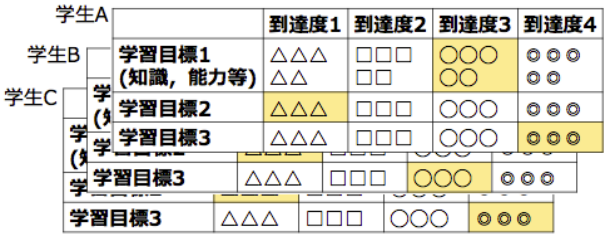

図 3 ルーブリックによる自己評価

	学習目標1	学習目標2	学習目標3
学生A	3	1	4
学生B	3	1	3
学生C	2	1	3
平均	2.7	1.0	3.3

図 4 自己評価の集計による授業評価

省察のコメントを記述する等の学習活動を取り入れることで学習としての評価(Assessment as learning)が実施可能である[(2)].

2.3 授業評価

学習者のルーブリックを採用することにより，学習者による自己評価結果を授業での学習到達度を表す得点として串刺しに集計することが可能となる（図 4）．集計は e ポートフォリオとルーブリックを組み合わせることで，随時教員へのフィードバックが可能となる．また，得点集計によるフィードバックにより学習目標のどの項目に関して，学習者がどの程度学べているか，または学べていないかが量的に評価することが可能となり，授業の改善に繋がる形成的評価が可能となる(Assessment for learning)[(2)]．一方，ルーブリックが体系化された教育から授業の学習目標を反映したものであれば，学習者の学習達成度を示す教育効果を示す根拠とすることも考えることができる．つまり，教育の質保証としての役割（Assessment of learning）を担うことも期待できる[(2)]．

2.4 授業改善

学習目標に関して，学習者の到達度が思わしくなかった項目に関しては，授業内容や，時間配分の見直しなどの対応が可能となる．また，ルーブリックの自己評価のための評価基準や記述語が学習目標に合っていないことも考えられるなど，授業設計の他，ルーブリックの改善にも繋げられる．また，個別の自己評価結果から著しく自己評価が低い学習者がいれば，授業についていくことができていない，授業を欠席しがちである等，学習に対して何らの問題を抱えていることを発見できることも期待できる．

2.5 サイクルモデルを適用する制限

学習目標を評価項目に反映したルーブリックを作成するためには，学習目標を明確にした授業設計になっていることが必要である．また，ルーブリックで記述語が曖昧な場合には，学習者が本来の学習到達度を正しく判断できない恐れがあるため，できるだけ記述の曖昧さを排除した記述語にすることが必要である．これにより，学習者の正確や傾向といった学習者特性による自己評価のぶれが最小限にすることができると考える．なお，このモデルは授業改善を目的としており，ルーブリックによる自己評価を授業の成績評価に用いることは想定していない．

3. おわりに

授業の学習目標を示したルーブリックを学習到達度の自己評価指標することで，学習者は自身の学びに対して客観的な指針を持つ事ができる．評価指標が明確に示されていることにより，学習到達度に対する評価プロセスを通じて自己効力感にもつながる事が期待でき，さらなる学習へのモチベーション向上に寄与することも期待できる．また，e ポートフォリオシステムにルーブリックを採用することは，教育の実質化という点でも非常に有用性がある．これは，教育の質保証として取り組む大学組織レベルでのカリキュラム改革は大きな困難が伴うことが容易に想像できため，ルーブリックにて学習者の学習到達度を授業単位で評価することで，ボトムアップ型の教育の質保証に取り組む活路にしたいと考える．

謝辞

本研究は JSPS 科研費 26730177 の助成を受けたものです．

参考文献

(1) 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会「学士課程教育の構築（審議のまとめ），http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm （2008）（2015/6/1 アクセス）
(2) Earl, Lorna M., “Assessment as Learning: Using Classroom Assessment to Maximize Student Learning”, Corwin (2013)